
暗き無貌

RAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗き無貌

【Nコード】

N6550Y

【作者名】

RAI

【あらすじ】

夜の種族と呼ばれる怪異の謎を解き明かすべく深淵を覗き込む男、フロード・サウロンと、遠くはないが近くもない未来から来たと言タケヒトう男、竹一シシロウ 志朗との奇妙で奇怪な奇譚章。

第一話 深淵を覗き込む男

「結果があつてだね、君。その結果が偶然であつたとしても、なぜその結果に至つたのか状況を紐解けば、いかにも必然的と思えるほど美しく、結果への道筋が見えるワケなのだよ。」

フロード・サウロンはコートのポケットをまさぐり、キャンディーの包み紙しか入ってない事を確認すると、眉間にシワを増やしながらも話を続ける。

「たとえばだね、我々人類が高い知能を持った生命体としてこのような姿形へと進化できた可能性、それを考えてみてくれたまえ・・・そこには、奇跡的な偶然が幾重にも重なり、それこそ何者かによつて導かれたとしか思えないような事象とさえ言える。しかしそれはだね」

「サウロン様、わたくしはサウロン様の事をお慕いしておりますわ。ですからそう遠回しなさらなくとも、ただ一言仰つていただければわたくし、たとえこの身すべてでも喜んでサウロン様に捧げますわ。」

サウロンの言葉をさえぎると、豪華なドレスに身を包んだ少女フランジェリカ・クラインは、鈴の様な美声を奏でながらサウロンの骨ばった手をそっと、己が手で包み込む。何か頼みごとがあると急に講釈をしだすサウロンの癖を、彼女は理解していた。

その事にサウロンは少々バツが悪い表情をしながらも、フランジェリカの手からスルリと抜け出すと「では」と改める。

「キャンディーがきれてしまつてね。君、少しお使いを頼まれて

くれないかね？なるだけ急いでほしいのだよ。それからケーキも欲しいところだね、カルティオのチェラルドケーキを3つ、そうそう！キャンディーは10カロン（約5kg）ほど・・・では、頼むよ？」

サウロンの、14歳の少女には些か容赦のない注文に、フランジエリカは満面の笑みで「はい」と答える。想い人から必要とされているというその事が、フランジエリカは何よりもうれしかった。

「それと、様をつけて呼ぶのはやめてくれたまえ。」

言うだけ無駄だと分かっていたながらも、部屋を出て行くフランジエリカの背中へサウロンはなげかけた。

ガス灯が電灯へ、電報が電話へ移り変わり、しかし、馬車が自動車へ変わるのももう少し後になるだろうそんな時代。

古を支配していた魔法や魔物が、科学と言う名の新しい力の影に押しやられ、人々は約束された明るい未来に希望を歌う、そんな世界。

そしてここはレムツェーラ王国首都ヴェラ Heim。その首都と真ん中に位置するヴェラ Heim 王立学院、その中で、今は本来の役目を果たしていない旧校舎をねぐらにしている変人が一人、名をフロード・サウロンと言う。

彼は、名門フロード家の次男として生を受け、物心ついた頃より学院の図書館に籠もり、所謂「本の虫」となってしまった。彼の生まれした後、フロード家は、三男、長女、次女と次々に子宝に恵まれた事もあり、本を読むことが唯一の楽しみであった陰気なサウロン少年は、家族からもしばしば存在を忘れられるほどであった。

そんな彼が突出した才覚を發揮させたのは新暦 1242 年、19 歳の頃だった。親の計らいで、半ば無理矢理王国騎士団に入団させられたサウロンは、その鋭い観察眼と、今まで蓄えてきた知識、一度見たものは忘れず記憶する思慮深い頭脳を遺憾なく發揮し、次々と難事件を解決に導き、「サウロンに解けぬ事件なし」と歌われ一躍時の人となる。が、しかし、そんな彼でも解けない事件があった。

それは、夜の種族と呼ばれるモノが関わる事件である。

夜の種族とは何なのか・・・何処から来て何処に行くのか、何の為に生きているのか、そもそも生き物なのか、それすらも分からず、ただ分かっている事は、突然現れ、害悪を撒き散らし、忽然と消える存在ということ。それは人類の敵という名を冠するには十分であり、王国側も秘密裏にソレを処理している。

元来、知識の探求が三度の飯より好きなサウロンは、自分の今ま

で蓄えた知識、そして、そこから紡ぎ出された理から一線を画した夜の種族という慮外の存在に歓喜し、のめり込んでいった。

1247年、サウロン24歳の冬、騎士団を辞めた彼は、異例の若さでヴェラヘイム王立学院の教授となる。もともと、親の意思で入団させられた騎士団に思い入れはなく、学院の、一般公開されていない文献や禁書の類を閲覧する事ができる教授という職は、長年の彼の夢でもあった。

しかし、実績無しでは教授になる事はできず、やむをえず入った騎士団での実績が「犯罪心理学」教授への道しるべとなった事は、サウロンにとってうれしい誤算であった。

そして、サウロンは、隠された歴史の闇と、本を通じて対面する事となる。

狂気に彩られた知られざる歴史、不可解な事象。それらはまるで、夢物語のような奇怪さで、サウロンを蝕み、魅了した。本来ならば作り話だと笑い飛ばしてような記録さえ、騎士団時代に何度か味わった奇妙な体験、常日頃から感じていた歴史の矛盾や、この世界の抱える違和感、それらを当てはめ考えると、身震いするかなような美しい一致を見出せた。

1254年、彼の元へ国王から直々に手紙が送られてきた。それは依頼書という名の招待状で、彼を本格的に夜の世界へと導く、そしてそれは、越えると決して戻ることのできない、正気と狂気との事象の地平線でもあった……。

「国王直々の依頼です。何でも急ぎの用とかってうわ!!」

ヴィクターの手から依頼書を？ぎ取ると、サウロンは王家の紋章が刻印された蠟を剥ぎ内容を確認する。

「ヴィクター君、君も人が悪い・・・いやいやしかし、久しぶりに骨のある依頼内容だね、早速準備に取り掛からなくては。」

まるで陸から水に戻した魚の様に生き生きと荷造りをし始めるサウロンをヴィクターは訝しげに見つめながら依頼内容を問おうかと口を開くが、その口から言葉が紡ぎ出されるすんでサウロンに止められる。

「ヴィクター君、深淵を覗くならば、深淵も等しく君を見返すのだ。自分の領分を弁える事ができなければ、待っているものは己が破滅のみ。」

いつもとはまるで雰囲気の違いサウロンにヴィクターは言葉を呑まざるおえなかった。

「うむ、では出かけてくる。戸締りをよろしくたのむよ?」

第一話 深淵を覗き込む男（後書き）

「あの……サウロン様はどちらへ？」

「これはこれは、クライン殿！！先輩なら今しがたお出かけになりましたよ？」

ケーキと10カロンのキャンディーを抱えたフランジェリカは、戸締りをしていたヴィクターの言葉を聞き、へたりとその場にしゃがみこんだ。

「クライン殿！！お具合でも悪いのですか？もしよろしければお荷物をお持ちいたしましょう。」

フランジェリカは溢れ出しそうな涙を拭くと

わたくしが遅すぎてしまったのだわ。ああ、サウロン様はキャンディをお持ちにならないままお出かけになられてしまった。わたくしの足が遅いばかりに……。

そう嘆くのであった。

第二話 インソロス

国王からサウロン宛への依頼書はこれで6通目となる。

初めて依頼書が届いたのは1254年、サウロンが31歳になつたばかりの晩秋。

依頼で訪れたのは寂れた港町インソロス。

人口はわずかに300人余りと推測される小さな港町は、魚の臍物が発酵したかのような醜えた臭いと、港町にもかかわらず風のない淀んだ空気が充満した陰気な場所だったとサウロンは記憶に焼きついた風景を思い出す。

「今となつては、^{まぶた}瞼の裏でしかインソロスを見る事ができなくなつてしまつたはずだが……。」

冒流的な手法で開かれた異界への門、そこから現れし名状しがたい……闇。

そしてそれらを町もろとも灰に還した超高温の炎柱。

その時私は傍観者であり、真実の毛先すら掴めずおめおめと逃げ帰る事しかできなかつた。

私は圧倒的な恐怖に晒され、赤子の如く逃げ惑うしかできなかつたのだ……。

しかし、あれから文献を読み漁り、様々な場所へ赴き情報を収集し分かつたことがある。

インソロスで行われていた開門の手法が、とある海神の召喚、祭事の手法と酷似していた事……そして、インソロスで私が目撃し、模写した異像はどうやら海神を模して作られたものだという事。

だが、実際に門から出てきたものは、もっと別な“何か”だった。

あれは何だったのか？そして、それらを燃やし尽くしたあの炎柱は・
・

サウロンは未だ解けることのない難問に頭を抱えながらコート
のポケットを弄る。

が、中にはキャンディーの包み紙しか入っていない事を思い出し、絶
望的な気分になる。

「しまった・・・私とした事が・・・」

目的地まではまだまだ時間がある上、町の近くを通る事もない。

キャンディーがないとなると・・・ここは睡眠をとっておいた方が
いいだろう。

と、サウロンは横になった。

教会の地下に禍々しく開いた巨大な地下空洞。

そこには吐き気を催す異臭と呻きが渦巻いていた。

辺りには腐乱しペースト状となった魚や様々な海産物が散乱して
おり、それは巨大な沼のような形を成していた。

その沼には何十もの・・・いや、白骨と化したものを含めれば何百
もの人間が浮いており、解け出た己が腸を浮力とし、漂い、呻き声

を上げていた……。

「サウロンさん、これは……おえ……がか……帰りましょ
う、私達ではどうしようもない……」

助手のヘイローは込み上げる吐き気と狂気につずくまり、ガタガ
タと震えている。

腐肉で成された沼の中央には祭壇が設けられており、町の住人が
寄り集まり何か、不吉な響きの呪文を唱えている。

それが沼に浮いた者達の呻き声と相まって、全てのものを冒流して
いるような、そんな怖気を震う響きと光景に、私は息を吸うことす
ら忘れていた……。

イ`ア イ`ア……イ`ア イ`ア……

「ダンナ、お着きになりましたぜ。」

御者の声で不愉快な夢から覚めたサウロンは、顔の上へのせたハ
ットを被り直すと礼を言い馬車から降りた。

「ところでキミ、キャンディーなどの甘いものを所持していない

かね？」

サウロンは「いや」とかぶりを振る御者に顰め面を向けると溜息を吐き、銀を渡す。

「ダンナ、こんな所に何か用ですかい？ここいらは嫌な噂しか聞かねえ不吉な場所ですぜ？行方不明者が続出するだとか、5、6年前に小さな港町があったが、一夜にして消えただとか・・・」

そのどちらにも心当たりがあるサウロンは苦笑を浮かべながら

「昔、やりのこした仕事があつてね。」

そう言い、インソロースがあつた場所へと歩を進めた。

「再度、インソロースで炎柱が上がった。至急現場へ赴き、事実確認を調査していただきたい。」

それが国王よりサウロンに送られた6通目の依頼書だった。

炎柱が上がったとされるのは3日前、ヴェラ Heim へ向かう貨物船の船員が、インソロース近海を航行中に目撃したらしい。

炎柱は辺りの海を赤く染めるほどの勢いで荒れ狂い、そのまま空へ吸い込まれるように消えたと・・・

それが事実ならば、長年喉に引っかかった魚の骨のようなインソロースでの事件解明に、何かしらの手がかりが見つけられるかも知れない。

サウロンは荒涼とした海岸伝いに歩きながら海を眺める。
どんよりとした空を映したソレは黒く、不気味に蠢いている……。

海は我々人間にとって、最も身近な異界である……薄い海面の
下には、暗く深い、誰も知りえぬ世界が広がっている。

「そう言ったのは誰だったか……」

サウロンは手記を懐から出すと、愛用の万年筆を動かしながら眩
くき、深い溜息を吐いた。

第二話 インソロス（後書き）

11月9日

午後4時28分。ヴェラ Heim より馬車で6時間かけ、サウスグレイン、インソロスがあったと思しき場所へ向かうも、途中より馬車での走行が難しいため徒歩にて移動。

次に馬車が来るのは翌日の同時刻。（午後4時）

空も海も濁った魚眼の様相。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6550y/>

暗き無貌

2011年12月2日18時50分発行